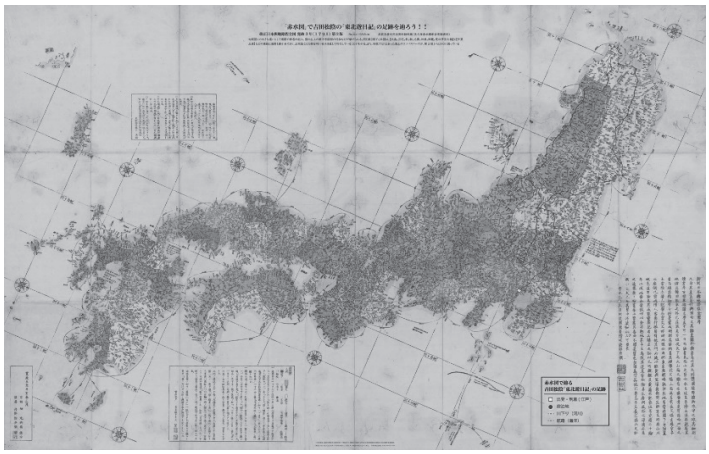
伊能忠敬より四十二年も前に
日本地図を作った　長久保赤水

長久保赤水顕彰会会長　佐川　春久

日本地図といえば、伊能忠敬（一七四五～一八一八）を思い浮かべる人が多いのですが、実は伊能図は江戸幕府により秘蔵され、江戸時代の庶民の目に触れることはありませんでした。

これに対して、伊能図よりも四十二年前（一七七九）に製作された長久保赤水（一七一七～一八〇一）の赤水図は、江戸時代末期まで約百年間のベストセラーとして版を重ねました。浦賀（神奈川県横須賀市）にペリー艦隊が来た頃も、庶民や幕末の志士たちが見ていたのは赤水図だったのです。松下村塾を開いた吉田松陰も愛用していた事が、故郷・山口の兄への手紙に残されています。



赤水図原寸大レプリカ（両面刷り）～顕彰会で取扱中

実は伊能忠敬も、測量時に赤水図を携帯していたと測量日記に書き残しています。明治維新に突き進む志士たちのエネルギーが、この赤水図により醸造されたという見方もできるのです。

伊能図との比較で興味深い点はまだあります。伊能図は全国の拠点を歩いた【測量図】として有名ですが、赤水図は多くの情報を収集して比較検証を重ねた【編集図】だということです。赤水は三十五歳頃から日本地図製作に取り組み、天文学の知識を取り入れ、二十余年の歳月をかけ熟考に熟考を重ね、日本で初めて経緯線が書かれた日本地図として「赤水図」を刊行し、世に出しました。

これらの業績が高く評価されて、二〇二〇年九月三十日に、赤水の関係資料六九三点が国の重要文化財に指定されました。この重要文化財指定に伴い、二十一年度から帝国書院の教科書「中学校社会科地図」に長久保赤水の名前と『改正日本輿地路程全図』（通称・赤水図）が掲載されました。

その内容は、「赤水図　江戸時代に長久保赤水がつくった地図です。写真の伊能図より約四十年早くつくられました。伊能図は幕府が一般に公開しなかったため、一般の人はこの地図を頼りにしました。」と紹介されています。

また、同年度から学研の参考書「学研ニューコース中学歴史」にも、長久保赤水の日本地図と世界地図が掲載されました。

長久保赤水は、この日本地図だけでなく、中国地図や世界地図、中国歴史地図帳（十三図）、朝鮮図、蝦夷之図なども製作しています。

六十一歳から水戸藩六代藩主、徳川治保公の侍講を勤めましたが、隠居格となった最晩年には、二代藩主、水戸光圀公が始めた「大日本史」の地理志編纂に従事するよう治保公からの特命を受けました。約十年間に及んだ仕事を赤水に預けたことは、藩主が赤水を手放したくなかった証ともいえます。その草稿原稿をはじめ紀行文や多くの書簡・書籍類が今も遺されております。

常陸国赤浜村（現在の茨城県高萩市）の農民として生を受けた赤水は、勉学を重ねて水戸藩第六代藩主、徳川治保公の侍講（学問の師）を勤めました。藩主に学問を教えるだけではなく、水戸藩への政策提言や儒学者・天文学者・地理学者・農政学者としても幅広い業績を残しています。

地図製作で一貫して重視したのは、使う人の利便性とわかりやすさです。縦八四・六センチ、横一二八・八センチの赤水図は、二十四分の一に折り畳めます。利用者が携行して動くことを想定しているのです。現状に誤りを見つけると修正を重ね、正しい情報にアップデートする努力も重ねています。

また、距離の表示では、十里（約四十キロ）を一寸（約三センチ）で表しました。地名等を記した頭の一文字目がその位置を示し、一文字が三里（約十二キロ）の距離を示しました。

一般庶民に広く活用された背景には、地理情報の伝達に創意工夫した赤水のたゆまぬ努力があり、これは今後、大いに評価されていくことでしょう。

赤水図世界に広がる
六カ国で四十四枚を大切に保管

長久保赤水の『改正日本輿地路程全図』（通称・赤水図）は、すでに、世界六カ国で四十四枚が有名コレクションなどで大切に保管されている事が東大の馬場章元教授の調査でわかっています。

赤水が生まれ育った赤浜（高萩市）の地で二十余年の歳月をかけて製作された日本地図が世界各地で江戸時代の日本を知る貴重な情報として使用されていた証です。

世界に広がった赤水図を最初に確認して公表した馬場章元教授（ひたちなか出身）は、こう強調します。「日本が国を閉ざしていた江戸時代に、赤水の地図が世界中で高い評価を受けた事実を忘れてはいけない。世界に通用する業績を残したといえる。その意味で、赤水は江戸時代の国際人でした」

さらに、馬場さんは、「日本では水戸光圀は、とても有名ですが、ヨーロッパで彼の名が周知されているとは思えません。しかし、長久保赤水の名は、海外の書物にも紹介されているのです。この事からも、今一度、赤水の国際人としての業績を考え直してみる必要があります」と言葉を重ねました。

馬場さんの調査などにより明らかになった海外の赤水図を、枚数の多い順に紹介します。まず、オランダ十四枚、アメリカ十枚、カナダ八枚、フランス七枚、イギリス三枚、ドイツ二枚です。

ドイツのミュンヘン国立民俗学博物館

での一枚が馬場さんの最初の発見でした。また、同じくドイツ・ルール大のものは、地図ではなくシーボルトが赤水図から作り、郭成章に書かせた手書きの地名辞典『改正日本輿地路程全図抄録』といいます。ルール大の保管状況から、赤水図が地理・地図情報としてだけでなく、日本の地名情報を理解する上でも使われていたことがうかがえます。

赤水図の地名などの情報数は初版で約四千二百、二版では約六千が記載されています。

さらに近年、ロシアでも赤水図が見つかっています。ロシア特使のレザノフが日本滞在中に入手して持ち帰り、一八〇九年と翌一〇年にロシア語訳の赤水図として、ロシアで発行されています。

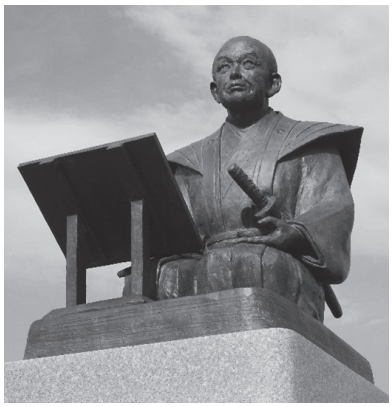
長久保赤水顕彰会の活動について

長久保赤水顕彰会は、平成四年（一九九二）十一月六日の赤水先生の誕生日（生誕二七五年）に、一二一名の会員の参加のもとに設立されました。奇しくも二〇二二年十一月六日に設立三十周年を迎えます。令和三年十二月末現在の会員数は北海道から沖縄県まで七七六名に増えました。

発足当初から会報『飛耳長目』の発行や資料収集、講演会、研修視察などを含む顕彰活動を行って参りました。初代大﨑宥一会長、二代目若松健一会長に続き、三代目の会長を平成二十四年（二〇一二）から、私が引き継ぎました。

平成二十四年（二〇一二）十一月三日には、長久保赤水先生銅像建立実行委員会（故皆川敏夫委員長）に協力して、JR高萩駅前に赤水先生の銅像並びに陶板（信楽焼）の日本地図と関東地方の拡大地図を設置しました。二〇一七年の生誕三〇〇年の五年前でした。

翌年には、東日本大震災で被災した長久保赤水のお墓の整備を行い、その後、遺された書簡（手紙）集の現代語訳やマンガ・絵本などにより赤水先生の偉大な業績を広く、わかりやすく発信して参りました。



JR高萩駅前の赤水像
作：日本芸術院会員能島征二氏／茨城文化団体連合副会長

ホームページを開設、赤水の業績を英語訳して世界中に情報発信

二〇一六年のある日、長久保赤水顕彰会顧問の東京大学大学院情報学環の馬場章教授（当時）から二つのご教授をいただきました。

「顕彰会の活動を地元の高萩市や茨城県だけの狭い範囲で行うのではなく、赤水先生の業績は世界で認められているので、ホームページを開設し、その業績を世界中に発信した方が良い。また、マンガの本を出すのであれば、国内の若者をターゲットに懸賞金をかけてPRしたらどうか」とご提案をいただきました。

このため、長久保赤水（一七一七～一八〇一）の生誕三〇〇年に当たる二〇一七年一月から長久保赤水顕彰会のホームページを開設しました。

当時、馬場章元教授の研究室にいた施井泰平さんが、スタートバーン㈱を東大の産学協同プラザ内に立ち上げていました。そこにお願いをして開設。長久保赤水の業績を英語訳して、世界中にその情報発信を開始しました。

同じく二〇一七年一月に、『マンガ長久保赤水の一生　付赤水先生為学入門抄・志学警』を発行しました。こちらには、懸賞金十万円で感想文の募集を開始しま

した。公募ガイドなどで、全国に向けて募集した結果、すぐに、全国の若者たちから、「懸賞金が欲しいのでマンガを送って」と注文が相次ぎました。

また、世界中に情報発信したホームページ開設の成果は、数ヶ月後に韓国テレビの取材が入りました。島根県竹島に対する取材でした。「外務省のホームページに掲載されている赤水図は、長久保赤水が亡くなった後の地図だ」ということで、日本国内の資料を調査・撮影した後に高萩市に取材に来ました。結果としては韓国国内では放送されませんでした。

その取材を受けた時に、島根大の舩杉力修准教授に相談すると「外務省と内閣官房の領土・主権対策企画室に連絡した方が良い」とご指導をいただきました。

外務省からは、全く連絡はありませんでしたが、内閣官房からは直ぐに、二〇一七年五月の長久保赤水顕彰会総会に職員が内密に来訪しました。

その職員に長久保赤水が残した資料や業績を説明しました。その結果、長久保赤水顕彰会と内閣官房領土・主権対策企画調整室が共催し、翌、二〇一八年七月二日から八月四日まで開催の特別展示『いったい何者?江戸の地図男!長久保赤水展』が開催されました。会場は、当時、日比谷公園の市政会館にあった領土・主権展示館（現在は虎ノ門に移転）で多くの方々が訪れ、長久保赤水の偉業に触れていただく機会になりました。同時に、楽しい漫画教室も開催しました。

二〇一九年の国の重要文化財指定を直訴

二〇一八年七月二日『いったい何者?江戸の地図男!長久保赤水展』の初日に展示会オープン記念式典のテープカットがあり、当時の福井照・内閣府特命領土問題担当大臣とともに参加、冷や汗をかきながら挨拶しました。その後、約四十分、福井大臣に赤水先生の業績を説明しましたが、眼光の鋭いSPに囲まれながらでした。

説明終了後、福井大臣は、記者団のインタビューで「伊能忠敬しか、実は知らなかった。今回、勉強させていただきました。天涯孤独でもと農民。勉強して勉強して、日本地図を作り上げたという赤水の遺徳に触れさせていただき、大変、光栄に思っております。

今、誰でも手にできる地図、正確な緯度、経度、或いは、道路、鉄道を記す、多くの人のための地図。当たり前ですけれど、これだけ苦労しなければ、正確には作れない時代があった。

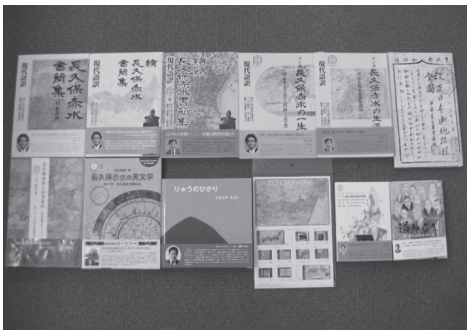
そして、この明治維新を成し遂げた百五十年前、今年、明治百五十年ですけれども、維新のエネルギーというのは、この赤水の地図をもとに、日本中を歩いて日本を知り、そして、世界の皆さんのお話をした。

その事がきっかけとなって、独立したという事でございますので、そういう意味でも、ぜひ、この展示館を訪れて、感じていただければというふうに思っています。

中央は福井照大臣（当時）・右が筆者

この時代から自分で情報を集めて一人で日本の領土を確定したという事は、正に、国として、もっともっと顕彰しないといけないと思います。

今回をきっかけに、この展示館だけでなく、もっと幅広く全国で近しく見ていただくような事も考えたいと思っています。」と答えていました。



長久保赤水顕彰会が発行した書籍など

福井大臣には、「二〇一九年に国の重要文化財に指定していただけると、二〇二〇年東京オリンピックの時に、実際の生の赤水資料を都内の博物館で展示して、世界中から来る多くの外国の人たちにも見ていただけるので、ぜひ、国指定をお願いしたい」と直訴しました。

また、後日、副大臣や内閣政務官・審議官・参事官などにも説明しました。この時も、同じお願いをしました。

結果として、二〇一九年四月から文化庁の国の重要文化財指定の調査が長久保赤水資料を所蔵している高萩市歴史民俗資料館で開始されました。

文化庁による国の重要文化財指定に向けた調査が始まる

はじめに、文化庁の調査官からは「資料の所有者が多いので、一つにまとめて欲しい。資料の一括指定が、今回の重要文化財指定の前提です」という説明がありました。

このため、すでに、高萩市に長久保赤水関係資料を寄贈されていたご子孫に続いて、長久保赤水顕彰会が所蔵していた二二九点全てを高萩市に寄贈しました。長久保赤水顕彰会副会長の横山功氏をはじめ、ご子孫や個人の皆様方のご厚意で高萩市に次々と赤水資料が寄贈されました。

その結果、二〇二〇年九月三十日に、赤水の関係資料六九三点が国の重要文化財に一括指定されました

国の重要文化財指定に伴い、例年、東京国立博物館で開催されていた国民への周知を目的とした展示会は、残念ながら新型コロナウイルスの流行に伴い中止されました。また、東京オリンピックも一年延期されてしまいました。

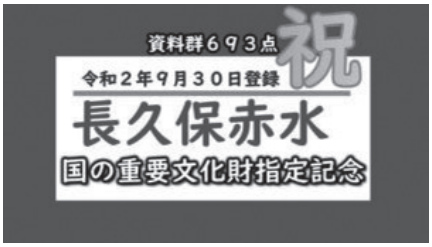
しかし、国の重要文化財指定の効果は絶大で、共同通信社をはじめとするたくさんのマスコミなどが、長久保赤水の多様な業績を発信してくれました。

この結果、令和三年から教科書と参考書にも、長久保赤水と赤水が製作した地図が掲載されました。

新型コロナウイルスの影響は、これだけでなく長久保赤水顕彰会総会や講演会など予定した事業も全て中止になってしまいました。

このため、理事の方のご協力をいただきながら、新たな動画制作とYouTubeでの配信に取り組み、現在、多くの映像を配信中です。お陰様で、共同通信社で

右の映画



祝・重文指定

高萩市におきましては、国の重要文化財指定を受けて、和泉元彌さんが主演する映画『その先を往け！日本地図の先駆者　長久保赤水』が製作され、一般への上映会を経て、現在、YouTubeで映画を配信中です。

また、教科書掲載に伴い、中学校の先生方からの問い合わせが急増しています。この時、まず映画のYouTube版を紹介して、ご覧いただいています。その次に、長久保赤水顕彰会の動画やホームページをご覧いただいています。最後に、そのホームページでも紹介しているマンガや絵本、書簡集などを読んでいただけるようにお願いしています。一人でも多くの国民の皆様方に、伊能忠敬よりも四十二年前に日本地図を製作した長久保赤水の偉大な業績を知っていただきたいと思います。

長久保赤水の名に込めた意志と考え方

「黄帝、赤水の北に遊び、崑崙（こんろん）の丘に登って、而して南望して還帰し、其の玄珠（げんしゅ）を遺せり。」これは長久保赤水が尊敬する荘子の著書『荘子（そうじ）』外篇・天地篇・象罔（しょうもう）の一節です。

「昔、皇帝が赤水（中国の赤水河）の北方を旅し、崑崙の丘に登って南方を望み見てから帰ってきたが、その玄珠（黒い珠玉）を見失ったことに気がついた。」（玄珠を失う＝道に迷う。玄珠は自然の道の象徴）。

赤水の時代の資料を顕彰していると、ひとりの人物に、実に多くの呼称があって混乱します。当時は、《本名（諱いみな）》の他に《通称》や元服（成人）後に名乗る《字》（本人の好みや目上の人が徳など考慮して名づけた尊称）、《号》（呼び名、雅名）などがあり、元服の節目や身分が変わった時などを機に名前を変えていました。

赤水は、五十一歳の長崎紀行後の手紙の中で、尊敬していた荘子の天地篇から引用し、本名の守道を玄珠（はるたか）に、字を伯義から子玉（しぎょく）、号を赤水に改めています。その赤水は、翌年、五十二歳で水戸藩郷士格となりました。先の荘子の寓話には続きがあり、見失った玄珠を探すのですが、知識（理性）ある者や、視力（感性）の優れた者、弁が立つ（情報力に優れた）者に次々と探させたが探せず、最後に少しぼんやりした（無心無欲の）者に尋ねるといとも簡単に見つけた。この時皇帝は、「他の者とは異なり、身を以て道を得ている」と語ったと言われます。

視力が優れるが故に色に惑わされ、博識になれば名誉欲に惑わされる、言葉巧になれば口がわざわいとなり肝心な心を損なう。見えるまま、あるがままに自然の法則に身を任せ、先を争う事なく無心でいることであるべき道を捉えることができるということを、この寓話は教えているのでしょう。

長久保赤水の名に込めた意志と考え方から学び、長久保赤水顕彰会もその志を軸に置いてこれまでの活動を展開して参りました。今後もその意志と偉業を後世に伝え、国の財産となった資料を基に更なる顕彰活動を展開して行ければと思います。

ホームページ